



白門板橋

2001. 3. 15 VOL.15

編集 中央大学学会 東京板橋支部
発行 〒175-0082 板橋区高島平2-23-3-101 TEL 03-3550-3300



■「新春の集い」あいさつ要旨 今年是他支部との交流もはかりたい

支部長 小日向 孝介

二〇〇一年明けましておめでとございます。

会員の皆様には、お健やかに新世紀をお迎えのこととお慶び申し上げます。日頃は支部活動に多大のご協力を賜り、また本日はご多忙の中を「新春の集い」にご出席いただき、厚くお礼申し上げます。

母校の話題から振り返ってみますと、改造内閣に高村学員が入閣。スポーツ面では、昨年シドニー五輪大会で女子水泳陣の活躍が、日本全土を熱狂させ、母校の名声を広めてくれました。恒例の新春・箱根駅伝は、総合順位こそ昨年と同じでしたが往路優勝を飾り、往年の駅伝王国の復活を彷彿させる感動的なものでした。

また、国家試験も教学一致した努力の結果、昨年の司法試験合格者は、久しぶりに百名の舞台を突破することができました。

板橋支部の近況について若干ふれますと、

一、新規会員の募集、ブロック制の確立に次いで、会員の実態並びに追跡調査を実施し、異動状況の把握を終えましたので、近くりニューアルした名簿の発刊準備を進めたいと思います。

二、昨年は、元オーストリア大使・黒川教授(中大)を招き、「音楽と外交」の演題で初の文化講演を開催し、格調高い内容に大変好評をいただきました。

三、本年は、都区内支部の連絡協議会を板橋支部の当番で開催する予定でございます。他支部との相互の情報交換と交流を図る機会をもちますので、皆様のご協力を願います。

古来一月は睦月と言われ、親睦の意味が含まれております。本日は限られた時間ですが、親睦の輪を広げていただきたいと思います。



支部ニュース

新世紀初の新年会に八十一名が集う



箏曲のBGMが流れる中、平成十三年「新春の集い」(新年会)が、去る一月十九日(土)の午後六時から区立文化会館大会議室で開かれ、八十一名の会員が集い、昨年を上回る盛会でした。

定刻を少し遅れて開会。小日向支部長に母校の動向と支部一年の事業活動の報告を兼ねた挨拶をいただいた後、全員で記念撮影を終

え、小野田顧問の発声で乾杯。欲談の合間には、初参加の会員の自己紹介があり、場内から盛大な拍手が送られました。

■大いに飲んで大いに語る
宴半ば、新年会を駆けもちして多忙な石塚顧問(区長)が駆けつけ、板橋区が東京で二番目に住みやすい区であるとユーモアに富む挨拶をいただきました。

同顧問の挨拶が終えたのを合図したかのように、ステージではカラオケ同好会の主導で演歌のメドレーが続ぎ、体育会系の会員が踊り出す一幕もあつて盛り上がりました。終宴近くに、大谷口ブロックの有志が幹事となり、今年四月八日に支部観桜会を行う旨の発表があり、持ち時間を瞬く間に使い切つて、恒例の「校歌」「惜別の歌」を全員が肩を組んで斉唱し、散会しました。

新年会のフィナーレ



支部連絡会の当番に

学員会の東京都区内支部連絡会が、昨年十一月二〇日夕、銀座六丁目の「高松」で開かれ、板橋区支部から水野、平山副支部長、池田幹事長及び大野事務局長の四名が出席した。各支部の情報交換と親睦が目的の会合で、今年に板橋区支部が当番を引き受けることになった。十月半ばに開催を予定。

観桜会の日程等決まる

記

日時 四月八日(日)
場所 茂呂山公園

*詳細は同封の案内書を参照して下さい。

集合場所 東上線上板橋駅南口

*午前十二時三十分までに集合して下さい。

参加費 四、〇〇〇円

世話役 垣内 外五名

雨天 東新町二ノ四五ノ六

桜川区民センターで会食。

申込み 三月三十一日(月)

同封の「申込み書」で垣内宛郵便又はFAX。

■年会費納入のお願い

平成十二年度の年会費が未納の方は、納入下さるようお願い致します。(久米)

■囲碁部が●●●●連続入賞者を出す

〇〇〇

白門囲碁大会が十一月二十五日(土)、母校駿河台記念館二階の大会議室で行われ、毎年出場している板橋区支部は、またまた入賞者を出す殊勲をたてた。

(敬称略)

- 入賞 △C1ブロック 川上 久雄
- 準優勝 △C2ブロック 木下 隆雄
- 優勝 桜井 正
- 第三位

(池田記)

母校のニュース

司法試験合格者

百名の大会を回復

平成十二年度の司法試験合格者が発表され、母校・中央大学が久々に一〇二名の合格者を出した。

- 大学別合格者は、次のとおり
- 一位 東京大学 一九八名
 - 二位 早稲田大学 一四〇名
 - 三位 慶應大学 一一六名
 - 四位 京都大学 一〇八名
 - 五位 中央大学 一〇二名
 - 六位以下略

一方、低迷の続いていた公認会計士試験でも合格者を二三名増やし、六〇名と健闘した。

大学別合格者は、次のとおり

- 一位 慶應大学 一三二名
- 二位 早稲田大学 九〇名
- 三位 中央大学 六〇名
- 四位 東京大学 五〇名
- 五位 同志社大学 三七名
- 六位以下略

箱根駅伝往路で優勝



平成十三年・新春箱根大学駅伝

競争で、母校・中央大学が一区と五区で健闘し、往路五区の上登りでは、二年生の藤原選手が法大、順天堂大と激しいデットヒートを展開して、往路の逆転優勝を飾った。

これは三十八年ぶりの快挙で、この勢いをもって復路にも大いに期待がかかったが、終盤で息切れして総合三位に終わった。何はともあれ、後輩たちの健闘を称えたい。



往路優勝を決めた藤原選手の激走

中大野球部一部に留まる



春のリーグ戦では善戦した母校野球部だったが、五輪大会に主将で四番の阿部を欠いた貧打線がたつて最下位となり、二部優勝の東農大との入れ換え戦でも貧打を繰り返し苦戦したが、辛くも勝ち越して一部残留を決めた。

黄金期を知る先輩たちには、胃が痛くなる野球部だが、今春のリーグ戦には有望な新人が入部したというものの、どれほどの期待をかけてよいものか。

阿部選手

ホロ苦いデビュー

*

中大野球部からドラフト一位で巨人へ入団した阿部慎之助選手が対広島オープン戦にスタメンデビュー。攻守ともに精彩なく、プロの厚い壁に苦戦している。頑張れ!

入学志願者一万人増加

平成十三年度の入学試験で、志願者が一万人強増加し、六万五千人が受験した。少子化の進行と複数受験の減少する中、センター試験導人が理工学部を受験者増につなげたようである。(栗原記)

新入会員のご紹介

どうぞよろしく



(記載順不同)

▽佐藤 啓司 昭和三十三年商卒

板橋区蓮根三丁目

一四ノ二五ノ二〇八

・税理士

▽田口 伸 平成元年法卒

板橋区東新町二丁目

二二ノ二二

・会社社員

▽千野 毅 昭和五十二年文卒

板橋区小茂根二丁目二ノ一八

・鍼灸指圧師

「秋の旅行記」

紅葉と愛する上州の旅

レポーター・三宅 正代

生漕学習は足利学校から

東京板橋区支部は、去る十一月十八〜十九日に恒例の行事で「秋の上州・伊香保榛名を訪ねる旅」をしました。

これまで駿河、下総など海の幸を堪能しているため、今年も四年ぶり若手幹事の奮闘で総勢三十名が快晴に恵まれた二日間を紅葉真っ盛りの上州に遊びました。

支部顧問の石塚板橋区長に見送られて、定刻の午前七時四十五分にバスで出発。首都高速く外環く東北道を順調に走って日本最古の足利学校に十時少し前に到着。

幹事の友人が迎えに来てくれるなか、シルバーのボランティアの案内で校内を見学し、向学に燃えた先人達を偲びました。入学を許された一行は、群馬・大間々町へ移動し、小学生の遠足さながらにトロッコ列車で渡良瀬溪谷を眺めな

がら駅弁での昼食は、実に美味でした。神戸(ゴウド)という妙な

駅で降りた一行は、富弘美術館に向かいました。

美術館では、手足の不自由な作家が、わずかに動く口に絵筆をくわえて描いた草花に、生命の尊さを詠った詩が味のある書体で書かれていて、観る者に深い感動を与えてくれました。

終始オリジナルツアーで旅の二日目は、榛名高原に「湖畔の宿」記念公園を訪ね、紅葉真っ盛りの榛名富士には、誰もが感嘆の声をあげました。その後、水沢観音を詣でてから、名物のうどめに蕪蕪の刺身で昼食。

星野美術で心を洗った後は、すぐ近くに満々と水を蓄える「草木ダム」を訪ねました。観光コースにないダム見学は、同窓の職員の手計らいで実現したもので、治水行政の一端を現場に見ることができ

お土産を調達した後、最後の訪問先は白門の学員が経営し学員も勤務する「聖酒造」。赤城山の麓にひっそりと建つ古びた木造の工場に、品評会で金賞を得た不思議さの謎解きを挑んだものの、徒勞に終わりました。しかし、赤城・榛名・妙義の上毛三山で代表される上州は、自然に恵まれた土地だけに名酒が生まれるのだらうと、誰もが納得して帰路に着きました。

幹事の計らいで、復路のバスもビンゴゲームで退屈することもなく、まだ明るい東京へ無事帰着できました。

今回の旅は、足利学校に始まり草木ダム、宿の凌雲閣に酒造会社まで、それぞれ関係学員のお世話で実現した楽しいものでした。



「湖畔の宿」記念公園で記念スナップ

訃報

▼関山 文男

・昭和五十四年 法学部卒

・板橋区向原二ノ二〇ノ一〇

平成十二年三月十三日逝去

▼沢渡 繁

・昭和二十五年 法学部卒

・板橋区中台二ノ三八ノ一〇

平成十二年八月十四日逝去

▼岩田 謙一

・昭和二十五年 法学部卒

・板橋区東坂下一ノ四ノ二四

平成十二年十月十日逝去

▼千葉喜代則

・昭和三十年 商学部卒

・板橋区高島平三ノ一〇ノ

一四ノ四〇七

平成十二年十二月二十三日

逝去、常任幹事。

▼布施 徳治

・昭和二十七年 法学部卒

・板橋区申板橋八ノ一四

平成十二年十二月二十五日

逝去。

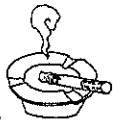
▼蘭田 嘉三

・大正十四年 法学部卒

・板橋区西台一ノ八ノ三

平成十二年二月一日逝去。

浅田文学ひろい読み



「壬生義士伝」

◆◆◆◆◆

(中略)

「貫一、お前のかが(妻)は、

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

出島関

初の
負け越し

若菜関健闘し勝ち越し!

◆◆◆◆◆

▽出島(武蔵川)

本名・出島武春 平8卒

東大関 七勝八敗

▽玉春日(片男波)

本名・松本良一 平6卒

西前頭5枚目 七勝八敗



若 菜 関

▽若菜(松ヶ根)

本名・中尾浩規 平7卒

西十両8枚目 9勝6敗

▽田中(友綱)

本名・田中康弘 平10卒

幕下東11枚目 6勝1敗

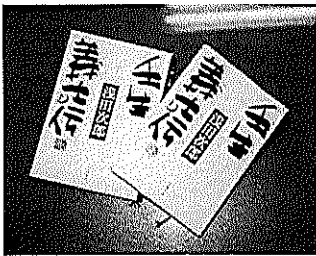
◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆



◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

■板橋宿の組成

仲宿は、江戸から数えて中山道第一の宿駅・板橋宿（村落としての地域名称を示す際には、下板橋といわれた。）の中心である。当時はこの宿駅も、京に近い

平尾宿に続いて南側には茶屋、「板橋」のたもとには、高札場があり、問屋場は中宿にあった。潰れることはなかった。

■■■■板橋宿は旅籠銀座

板橋宿の本陣は飯田家であり、中宿で問屋名主を勤めていたが、最近、近世から近代にかけてのま

さ一五町四九間（約一・七キロメートル）で中宿に本陣があり、脇本陣は上宿、中宿、平尾宿にそれぞれあった。また近世後期には、下板橋宿は三つの組に分かれ、名主の名を冠して宇兵衛組、市右衛門組、市左衛門組といっていた。

地名の由来…●⑦

「仲宿」の巻



宇兵衛家は中宿にあり

飯田氏、市右衛門家は平尾宿にあり豊田氏を、市左衛門家は上宿にあって板橋氏を称していた。

近世前期、中期については不明な部分が多く、近世後期にはこの三家が

本陣は、参勤交代の大名や公家などの休息・宿泊施設として利用され、脇本陣はその補助的な役割を担った。本陣は最も富裕で有力な旧家が、名主や問屋などを兼務している場合が多かった。しかし幕末までの間に、諸物価の高騰と宿賃との相対的低下などで、潰れる家も多かった。しかし板橋宿においては、近世を通じて本陣家が

下板橋宿の名主をほぼ世襲して勤めていたものと思われる。幕末期には、有名な和の宮の下向があり、板橋宿にも一泊した。宿所は本陣（飯田新左衛門家）でなく、脇本陣の飯田宇兵衛家とな

っている。宿場は貴人を対象にするだけでなく寛政年間に六八軒、幕末期にも総戸数の約一割の五四軒が旅籠であった。（中三川記）

方から上宿、中宿、下宿と分けていたようであるが、板橋宿では右神井川にかかる「板橋」より北を上宿と呼び、現在の王子新道までを中宿、王子新道から南を平尾宿と呼んでいた。



編集後記

●：新しい世紀を迎えても明るい話題に乏しい折、母校の後輩たちが国家試験やスポーツに活躍するニュースに接すると、気分がいいものだ。母校の名声を広めたことより、文武両道に通じる質実剛健の精神が息づいていることに安堵した。

●：今号には、いつになく訃報が多く、大変悲しい思いをした。が、考えてみればそれだけ高齢化が進んでいるということになる。「死」は、誰もが迎えないけれどもならない宿命だが、死を悲しむより「現在」をいかに生きるかを考えたい。

●：例年になく寒さが続いた今年の冬も、彼岸が近づいてくると頬をなでる風も、さすがに温もりを感じる。あと二十日も寝ると、支部の観桜会。

年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからず。

今年も元気に観桜できることに、感謝したい。

（平山記）